

眼の話



エンジン

眼の話

作：エンジン

その文書は、いつの間にか俺の部屋の郵便受けに入っていた。昨日、飲み過ぎで起床が正午になってしまい、気だるさとともにテレビをぼーっと眺めていたのだが、ふと朝刊の内容が気になり、玄関へと歩いた。その時、新聞に紛れていた手のひらサイズのメモ帳を見つけたのだ。

配達員の忘れ物かと考えたが、丁度やることもなく、妙に使い込まれた感じのあるそのページを開いてみると、こんなことが書かれていた。

――十九世紀初頭まで南アフリカに存在していたとある原住民族は、極めて独特な風習を持っていた。

彼らは大体17歳ほどで大人と見なされ、他の民族と同じように通過儀礼を行わなければならない。こういった「成人の儀」は部族によって多種多様で、たとえば日本で一時期ブームになったバンジージャンプなども、元はバヌアツ共和国の「ナゴール」という儀式だ。

だが、この部族のそれは他と比較しても極めて異様なものである。

まず、密林に生息しているテテパラという樹木の枝を折り、簡単な棒を作る。

そして、儀式の対象者の眼の端にそれを差し込み、そのままこの原理で眼球をえぐり取るのだ。

勿論、両方である。

その後、痛みで悶絶する対象者の両目を灰で止血し、儀式は完了。彼らはそのまま、両眼のない状態で一生を過ごすのである。この儀式は男女の区別なく行われる。

「眼球に頼って世界を認識するのは未熟であり、成人しているとは言えないから」と言うのが彼らの考えであるらしい。

最初に彼らの住処を訪れた調査団はその異様な姿に大変驚かされたのであるが、それ以上に驚愕すべきは、彼らの視覚認知能力が失われていないということである。つまり、彼らは眼球がないにも関わらず、目の前のものが見えるのだ。

試しに、動向していた宣教師が彼らの眼前に一冊の聖書をかざしてみた時、彼らはそれに興味を示し、書かれている文章を指さしてこれが何なのかを質問し始めた。

彼らは十九世紀の初めまで間違いなく存在していたのであるが、何が原因で滅び去ったのかは全く不明である。

ある宣教師によれば、数ヶ月ぶりに彼らの住処を尋ねた時、そこは何年も放置されたとは思えない無人の廃村があっただけだったという。

――何だ、この気色の悪い話は、せっかくの休日が台無しじゃないか。

自分の眼をくり抜くアフリカの原住民だと？ 嘘っぱちな上に、グロテスクで不快だ。全く、読むんじゃなかった。

俺はメモ帳をしわくちゃに丸めゴミ箱に投げ捨て、気分を変える為台所へと歩いた。

スクランブルエッグを作るため、冷蔵庫から取り出した卵をボウルの上で割り、それを菜箸で混ぜる。

・・・何やら、眼がかゆい。

あんな話を讀んだからだろうか。自分の眼が、自分のもので無いような違和感がふつふつとわき上がってくる。

瞼の辺りが特に痒い。瞼の裏が、むずむずする。

どんどん収まらなくなってくる。自然と手の動きが荒っぽくなり、かゆみと同時に痛みが走る。

だが、止められない。顔の中、眼球の中で、何かとてつもなく小さなものが好き勝手に暴れ回ってやがる。

俺は菜箸をひっくり返し、自分の顔へと向け――

――ようやく、かゆみは収まった。

激しい痛みでしばらくの間床をのたうちまわったが、それも徐々に収まってきた。

片目だけで済んだのは、不幸中の幸いだった。だがおそらく、サザエの類は一生食べられないだろう。

俺は今、ガーゼを持った片手で眼窩から流れてくる血を止め、もう片手に例のメモを持って外を歩いている。間違いなく、このメモに書かれている文章が全ての原因だ。

だが、これを破いたり燃やしたりした途端、自分の元にあの痒みの元凶がなだれをうって襲いかかってきそうな、妙な恐怖心が根付いてしまっている。

この紙が、俺の行動を支配し、向かうべき場所へと向かわせているのだ。

たどり着いた見知らぬ民家のポストへ、俺はそっとメモ帳を入れた。その途端、体が軽くなったような気がした。もう、俺がターゲットになることはないだろう。

あの話がどれだけ拡散され、どれだけの人間が眼を通すのか、気にならないと言ったらウソになるが、今はとにかく疲れた。

でもまずは、病院に行かなければ。

(完)